

# 杜詩における「執熱」について

後藤 秋 正

はじめに

乾元二年（七五九）の夏、司功参軍として華州（陝西省華県）にあった杜甫は、二十句からなる「夏日歎」（『杜詩詳注』巻七。以下『詳注』）を詠じたのに続いて、「夏夜歎」（『杜詩詳注』）を書いた。こちらは二十四句からなる。

- 1 永日不可暮 永日 暮る可からず
- 2 炎蒸毒我腸 炎蒸 我が腸を毒す
- 3 安得万里風 安くんぞ万里の風の
- 4 飄飄吹我裳 飄飄として我が裳を吹くことを得ん
- ……
- 13 念彼荷戈士 念う彼の戈を荷うの士
- 14 窮年守边疆 窮年 边疆を守るを
- 15 何由一洗濯 何に由りてか一たび洗濯せん
- 16 執熱互相望 執熱 互いに相い望む

23 況復煩促倦 況んや復た煩促して倦むをや

24 激烈思時康 激烈 時の康やすからんことを思う

この年の夏に早魃が続いたことは、『旧唐書』巻十、肅宗紀、乾元二年四月の条に、「癸亥、以久旱徙市、雩祈雨。」（癸亥、久しく旱するを以て市を徙し、雩して雨を祈る。）という記述があることから確認できる。華州でも酷暑が続いた。「夏日歎」では暑熱の過酷さを、「飛鳥苦熱死、池魚溷其泥」（飛鳥 熱に苦しみて死し、池魚 其の泥に溷る）と表現している。杜甫は夜になっても続く暑さに耐えかねて、涼しい風が吹くことを願い、辺境の守備に従事する兵士達の心境を思いやり、平穏な時世になることを祈っているのである。

鈴木虎雄『国訳漢文大成 杜少陵詩集』（国民文庫刊行会、一九二九）は「夏夜歎」の第十六句に見える「執熱」

を「熱を執りて」と読み、「字解」では、『詩経』小雅桑柔篇に、……とあり、熱気のものを手にもちたるとき、その熱を去るには、水にてその手をあらはぬものなきをいふ。孟子（離婁篇）に之を引きて、……といへり。孟子は濯を仁にたとへたり。杜詩の意も表裏の二様あるなるべし。」

と述べ、二句を、「彼等は熱いものを手にもちながらおたがひに遠方から望みあつてゐる、どうしたならばその熱気を水でさらりと洗ひ去ることができようか。」と訳している。ただし、「熱いもの」については説明を加えない。

確かに「執熱」は『詩経』や『孟子』にこそ見られる語ではあるものの、『文選』や『玉台新詠』には見られないように、頻繁に用いられる語ではない。ところが『全唐詩』においては八例が見出せるようになる。しかも、そのうちの七例までが杜詩中の用例であり、かつ杜詩以前の用例はない。また、杜詩に「○熱」という形で用いられる語は、詩題に用いられるものも含めると、「苦熱」四例、「炎熱」「触熱」「毒熱」各二例、「寒熱」「煩熱」「内熱」「春熱」「冬熱」「暹熱」「餘熱」「林熱」「耳熱」各一例であり、「執熱」は群を抜いて多くなっている。従つて「執熱」は杜詩において特徴的な語であると見なしてよからう。では「執熱」の語はどのような意味を含んで用いられているの

であろうか、「熱いものを手に持つ」と解しておくだけでよいのであろうか。この点について若干の考察を加えてみたい。

#### 一 成都時代以前

杜詩において最も早く「執熱」の語が用いられるのは、『大雲寺贊公房四首』〈其四〉（『詳注』巻四）においてである。この詩は至徳二載（七五七）、長安で賊中であつた時に、朱雀街の南、懷遠坊にあつた大雲寺の僧、贊上人を訪ねた時に作られた。末の四句に、次のように言う。

既未免羈絆 既に未だ羈絆を免れざるも

時來憩奔走 時に來つて奔走を憩わしめん

近公如白雪 公に近づけば白雪の如し

執熱煩何有 執熱 煩何か有らん

『九家集注杜詩』巻二などが、「執熱」の典拠として『詩経』大雅・桑柔を引くのは妥当である。「桑柔」には、次のように言う。

告爾憂恤 爾に恤うれいを憂うれうることを告ぐ

誨爾序爵 爾に爵を序つづづることを誨おしわう

誰能執熱 誰か能く熱きを執り

逝不以濯 逝こに以て濯すすわざらん

「桑柔」は周の厲王の悪政を諷った詩とされる。「誰能」の二句について、毛伝には、「濯所以救熱也、礼亦所以救乱也。」（濯は熱を救う所以なり、礼も亦乱を救う所以なり。）と言ひ、鄭箋には、「我語女以憂天下之憂、教女以次序賢能之爵。其為之、当如手持熱物之用濯、謂治國之道、当用賢者。」（我女に語るに天下の憂いを憂うるを以てし、女に教うるに賢能の爵を次序するを以てす。其れ之を為すに、当に手に熱物を持つつの濯を用うるが如くなるべし、治國の道は、当に賢者を用うべきを謂う。）と言ふ。熱い物を手に持つてしまつた時には冷水で洗つてさますように、人民が兵乱に疲弊する世の中を正すには、賢能の士を登用して善政を布かなければならないというのである。ただし、「執熱」については別の説もある。一例を引いておけば、時代は下るが、歐陽脩『詩本義』卷十一には、「……謂遭王暴虐、思得賢君以紓患。如執熱者、執不思往就水、滌濯其煩也。」（……王の暴虐に遭ひ、賢君を得て以て患いを紓くせんことを思ふを謂う。熱に執わるる者の如きは、執か往きて水に就き、其の煩いを滌濯するを思わざらんや。）と言ふ。歐陽脩は暑熱にとらえられて苦しむ、と解釈するのである。つまり、「桑柔」には、二通りの解釈があることとなる。「桑柔」のこの部分は、『孟子』離婁上にも引用

されている。

孟子曰、……孔子曰、仁不可為衆也、夫國君好仁、天下無敵。今也欲無敵於天下、而不以仁、是猶執熱而不以濯也。詩云、誰能執熱、逝不以濯。

孟子曰く、……孔子曰く、仁には衆を為す可からず、夫れ國君 仁を好まば、天下に敵無し、と。今や天下に敵無からんことを欲し、而も仁を以てせず、是れ猶お執熱なるに而も濯を以てせざるがごときなり。詩に云う、誰か能く執熱なるに、逝に濯を以てせざらん、と。

訓読は湯浅幸孫・日原利國・加地伸行『孟子』（世界古典文学全集、筑摩書房、一九七二）によつた。同書の訳文は次の通りである。

孟子が言つた、「……孔子もまた、『人数の多いことも、仁徳には及ばない。國君が仁を好めば、天下に敵するものはない』と言つた。今日の諸侯は天下に敵のいないことを希望しながら、仁政を行わない。これは、熱気に苦しみながら、水浴して涼を求めないのと同じだ。詩にも、『誰か炎熱を苦とせず／水浴しないでおられよう』とある」

つまり、「執熱」を「熱気に苦しむ」ことであると解釈

するのである。注においても、「執熱は熱い暑氣。……濯は、あらう、水浴することと言う。」と説明する。<sup>(1)</sup>つまり、『詩經』の「執熱」については早くから、熱い物を手に持つとする解釈と、暑氣（暑熱）にとらえられて苦しむ、あるいは熱い暑気とする解釈が併行していたのであり、『孟子』は後者の意味で用いていたことなるう。<sup>(2)</sup>

「大雲寺贊公房四首」〔其四〕にもどらう。杜甫は（其一）の冒頭でも、大雲寺のたたずまいを、「心在水精域」（心は水精の域に在り）と描写し、「水精の域」に喩えていた。この水精の語は贊上人の心境を白雪に喩えていることと通ずるものがある。白雪の清らかさから連想されてきたのが「執熱」の句であることは間違いない。鈴木虎雄前掲書は二句を、「あなたに近づくと白雪に近づいた様なもので熱いものを手にしたときのあつくるしさ」こときはなんでもなく消えうせてしまふ。」と訳す。『詩經』の一方の解釈に沿った訳である。また、韓成武・張志民『杜甫詩全訳』（河北人民出版社、一九九七）は、「靠近您就像靠近白雪一樣、使我内心火辣辣的煩躁情緒化為烏有。」と訳している。贊上人のそばにいと白雪に近寄つたように、杜甫の火のように熱くいらだつ心がさつぱりと消えてしまう、というのである。これは、『詳注』が引く、「遠注」（張遠『杜詩

會粹』）に、「公詩用執熱、俱作熱不可解、言一對贊公、則心地自涼、覺煩囂尺積矣。」（公の詩に執熱を用うるは、俱に熱、解く可からずと作す、一たび贊公に対えば、則ち心地は自すから涼しく、煩囂の尺く積くるを覚ゆるを言う。）と言っているのとほぼ同じである。杜甫「入奏行、贈西山檢察使竇侍御」（『詳注』卷一〇）に「煩熱」の語を用いて、「蔗漿歸厨金盃凍、洗滌煩熱足以寧君軀」（蔗漿、厨に歸して金盃凍り、煩熱を洗滌して以て君が軀を寧んずるに足れり）と言うのも、玉壺の氷のように清廉である竇侍御が朝廷に入れば、暑苦しさを洗い流して天子の体を安らかにするであろうという意味であつて、「大雲寺贊公房」に通ずる表現である。

では、他の杜詩の「執熱」はどうであろうか。先に引いた「夏夜歎」の中間部分を再度掲げる。

念彼荷戈士 念う彼の戈を荷うの士

窮年守辺疆 窮年 辺疆を守るを

何由一洗濯 何に由りてか一たび洗濯せん

執熱互相望 執熱 互いに相い望む

『九家集注杜詩』卷三は、「言荷戈之士、久苦于炎熱、但想望而已、未能一洗濯。」（言うところは戈を荷うの士は、久しく炎熱に苦しみ、但だ想望するのみにして、未だ一た

び洗濯する能わずと。)と解している。国境の守備兵たちは炎熱に苦しみ、熱気が去ることを心待ちにしているというのであろう。<sup>(3)</sup>これに対して朱鶴齡『杜工部詩集輯注』巻五は、鍾惺の發言を引いて次のように言う。<sup>(4)</sup>

鍾惺曰、考亭解詩、執熱作執持之執。今人以水濯手、豈便能執持熱物乎。蓋熱曰執熱、猶云熱不可解。此古文用字與処。濯即洗濯之濯、浴可解熱也。杜詩屢用執熱字、皆作実用、是一証拠。

鍾惺曰く、考亭 詩を解して、執熱を執持の執と作す。今人 水を以て手を濯うに、豈に便能く熱物を執持せんや。蓋し熱を執熱と曰うは、猶お熱 解く可からずと云うがごとし。此れ古文の用字の奥処なり。

濯は即ち洗濯の濯、浴して熱を解く可きなりと。杜詩は屢しば執熱の字を用い、皆な実用と作す、是れ一証拠なり。

考亭は朱熹(一一三〇〜一二〇〇)のこと。「執熱」が「実用」であると言うのは、これが抽象的な意味ではなく、夏の酷暑にとらわれるという意味で用いられていることを指摘しているのであろう。つまり朱鶴齡は、杜甫が、兵士たちは酷暑の中で見張りをしているが、その酷暑をどうしたら洗い流せるだろうかと氣遣っているとして解していたこと

になろう。

## 二 成都時代と夔州時代

次に「執熱」の語が用いられるのは、「大雨」(『詳注』巻一一)である。この詩は宝応元年(七六一)の初夏に成都で書かれた。冒頭の八句を引こう。

西蜀冬不雪	西蜀	冬に雪ふらず
春農尚嗷嗷	春農	尚お嗷嗷たり
上天回哀眷	上天	哀眷を回らし
朱夏雲鬱陶	朱夏	雲 鬱陶たり
執熱乃沸鼎	執熱	乃ち鼎を沸かし
織綺成縑袍	織綺	縑袍と成る
風雷颯万里	風雷	万里に颯たり
霈沢施蓬蒿	霈沢	蓬蒿に施す

上元二年(七六一)の十月以来、蜀の西部では旱魃が続いた。宝応元年(七六一)の夏、杜甫は西川節度使の嚴武に「説旱」(『詳注』巻二五)を奉って、囚徒を解放するなどの善政を施すことによって天候を回復させることを説いた。そこでは「今蜀自十月不雨。」(今蜀 十月より雨ふらず。)と言っている。そのようなおりに、夏の雨雲がわき起こり、「執熱」がかなえの湯を沸騰させるかのようにな

った、というのである。『詳注』などの従来の注はこの「執熱」については出典を示さない。鈴木虎雄前掲書は、「あつさは鼎のお湯をわかす様であり、……。」と訳し、「字解」では、「詩経の語、ここはただ熱の義に用ふ。」と言う。やや詳しく説明を加えるのは李誼『杜甫草堂詩注』（四川人民出版社、一九八二）であり、次のように指摘する。

執熱兩句、酷熱變為鼎沸、細葛成了棉袍。執熱、執得難以解脫。（參見徐仁甫『杜詩注解商榷』卷十二）

『杜甫草堂詩注』が参照した徐仁甫『杜詩注解商榷』（中華書局、一九七九）は、「大雨」の「執熱」の二句について次のように言う。関連部分を引用しよう。

施鴻保訓「執」為「極」（見『讀杜詩說』卷二十一）多病執熱奉懷李尚書」。按、施說較妥。「執熱」就是「極熱」。下句「織絛」可証。……可見「織」是形容詞。此詩「執熱」之執也是形容詞。這兩句詩的「乃」「成」二字為互文、都可當作「為」字解、……杜甫『泥功山』、

「白馬為鉄驢、小兒成老翁。」皆「成」「為」互文、「成」猶「為」也。所以「執熱乃沸鼎」就是形容極熱成為沸鼎的意思。

「執」は対句構成から考えて形容詞であり、盛んな、ひどいという意味になることは、この句においては理解でき

よう。ただし、例えば次に引く「毒熱寄簡崔評事十六弟」（『詳注』卷一五）で、「執熱」と対をなすのは「開襟」であり、こちらは動詞として解釈せざるを得ず、形容詞であるとい律に判断するのは適切とは言えない。また、前掲『杜甫詩全訳』は、「天氣酷熱啊像泡在滾滾開的鍋裏、……。」と訳し、李寿松・李翼雲『全杜詩新釈』（中国書店二〇〇二）は、「悶熱得像置身沸鼎之中、……。」執熱、熱不可解。」と言っている。ぐらぐらと煮え立つ鼎の熱湯に身を置くような暑さである、というのである。

「毒熱寄簡崔評事十六弟」は、大暦元年（七六六）の初秋に、夔州（四川省奉節県）で内弟の崔評事にあてて書かれた。

1 大火運金氣 大火 金氣を運らし  
2 荊揚不知秋 荊・揚 秋を知らず

……

13 開襟仰内弟 開襟 内弟を仰ぎ  
14 執熱露白頭 執熱 白頭を露わす

『旧唐書』卷十一、代宗本紀の大暦元年六月の条に、「自春旱、此月庚子始雨。」（春より旱し、此の月庚子始めて雨ふる。）という記録があるが、夔州でもこの年、初秋になっても暑気がおさまる気配がなかった。詩題の「毒熱」

の語を杜甫は「寄常微君」(『詳注』卷一四)でも用いている。こちらは、大曆元年の春、雲安(重慶市雲陽県)にあつて、雲安の西北西、開州(重慶市開県)にいる常微君に寄せたものであり、尾聯に、「開州入夏知涼冷、不似雲安毒熱新」(開州 夏に入りて知る涼冷なるを、似ず雲安 毒熱の新たなるに)と言っている。酷暑を指す語である。「毒熱寄簡崔評事十六弟」の「執熱」の語について、林継中「杜詩趙次公先後解輯校」己帙卷二(上海古籍出版社、一九九四)は、『詩経』の「執熱」の二句を引くが、多くの注釈は出典を示さない。鈴木虎雄前掲書は、「開襟」の二句を、「自分は襟を開いて内弟がみたならばとおもひ、あついものを握つてゐる様なくなるしさでしらがあたまをまるだしである。」と訳し、「字解」では、「あつきものを手にもつこと、『詩経』に出づ。ここはそれほどあつきをいふなり。」と述べる。前掲『杜甫詩全訳』は、「敞開衣襟仰望着你、苦于炎熱而裸露着白頭。」と言う。鈴木虎雄前掲書と大差はないが、炎熱に苦しんで白髪頭をむき出しにすると言っているところがややニュアンスを異にする。

ついで大曆二年(七六七)の晩夏、夔州で作られた「課伐木」(『詳注』卷一九)を引こう。使用人に命じて垣根を修理する材木を伐り出させたことを詠ずる詩である。

31 爾曹輕執熱 爾が曹 執熱を軽んじ  
32 為我忍煩促 我が為に煩促を忍ぶ

「執熱」については『杜詩趙次公先後解輯校』戊帙卷二が『詩経』の二句を引いている。また、黃生『義府』巻上は、この詩の「執熱」に言及して、次のように指摘する。

孟引詩、誰能執熱。考詩、鄭箋作執持熱物解。趙注因之、他注亦因之、並誤。執如執友之執、執友者、其交不能解、執熱者、其熱不可積。……杜甫詩、爾曹輕執熱、皆得本意。

孟 詩の「誰能執熱」を引く。詩を考うるに、鄭箋は熱物を執持すの解を作す。趙注は之に因り、他注も亦之に因るは、並びに誤れり。執は執友の執の如し、執友は、其の交わり解く能わず、執熱は、其の熱積とく可からず。……杜甫の詩の、爾が曹 執熱を軽んずは、皆な本意を得たり。

黃生はかたく結ばれた友情のように、容易に解くことのできない暑熱と解している。なお「執友」の語は、『礼記』曲礼上に、「執友称其仁也。」(執友は其の仁を称するなり。)とあり、鄭注に、「執友執志同者。」(執友は志を執ること同じき者なり。)と言っている。またこの語は杜甫「哭王彭州掄」(『詳注』卷一七)の冒頭に、「執友驚淪没、斯

人已寂寥」（執友 淪没するに驚く、斯人 己に寂寥なり）  
 という一例が見えている。「煩促」の語は、張華「答何劭  
 二首」（其一）（『文選』卷二四）に、「恬曠苦不足、煩促每  
 有余」（恬曠は苦だ足らずして、煩促は毎に余り有り）と  
 ある。あわただしく多忙なこと。鈴木虎雄前掲書は二句を、  
 「おまへたちは炎熱を冒してなんともおもはず自分のため  
 にうるさききもちをがまんしてはたらいてくれた。」と訳し、  
 「執熱」の「字解」では、「あついものを手に取ること。語  
 は詩経にみゆ。ここは炎熱を冒すことをいへり。」と言う。  
 前掲『杜甫詩全訳』は、「執熱」を「酷熱」のことだとし、  
 「你們不怕烈日酷暑、為我忍受了多少勞苦！」と訳している。  
 さらに信応挙『杜詩新補注』（中州古籍出版社、二〇〇二）  
 は、『爾曹』二句、言執熱之天、人人均畏、但年輕人能經  
 受得起、故云『輕執熱』。并請為我受執熱之煩促。」と述べ、  
 これも酷暑と解釈している。

### 三 夔州時代以後

杜詩には詩題に「執熱」を用いた「多病執熱奉懷李尚  
 書」（『詳注』卷二二）もある。大曆三年（七六八）四月、  
 江陵（湖北省荊州市）の近郊で書かれた。冒頭には次のよ  
 うに言う。

衰年正苦病侵凌 衰年 正に苦しむ病の侵凌するに  
 首夏何須氣鬱蒸 首夏 何ぞ須いん気の鬱蒸なるを  
 『詳注』は邵注（邵宝集註『刻杜少陵先生詩分類集註』  
 卷二二）を引いて、「執、囚也。囚困於熱也。」（執は囚わ  
 るるなり。囚われて熱に困しむなり。）と言う。鈴木虎雄  
 前掲書は「題義」で「多病であつさにくるしめられている  
 とき李尚書をおもうた詩」と言う。病気がちである上に、  
 江陵のあたりでは夏になったばかりなのに、すでにむっと  
 するような熱気が立ちこめていたのである。

杜甫が最後に「執熱」の語を用いたのは、「北風（春生南  
 国瘴）」（『詳注』卷二二）であり、大曆四年（七六九）の春、  
 新康江口（湖南省望城县）から湘江を溯って潭州（湖南省  
 長沙市）へ行こうとした時に書かれた。冒頭と中間の六句  
 を引こう。

- 1 春生南国瘴 春に生ず南国の瘴
- 2 氣待北風蘇 氣は北風を待ちて蘇る
- ...
- 9 滌除貪破浪 滌除 破浪を貪り
- 10 愁絶付摧枯 愁絶 摧枯に付す
- 11 執熱沈沈在 執熱 沈沈として在れば
- 12 凌寒往往須 凌寒 往往須まつ



13 且知寛病肺 且つ知る病肺寛やかなるを

14 不敢恨危途 敢えて危途を恨まず

『杜詩趙次公先後解輯校』己帙卷四は、第十一・十二句

について、「兩句則又尚苦熱 反須凌寒也。」（兩句は則ち又尚熱に苦しみ、反つて寒を凌ぐを須つなり。）と言う。

簡潔だが適切な説明である。趙次公の言うとおり、この執熱は暑熱に苦しむことである。鈴木虎雄前掲書は「字義」で、「執熱 あつきこと、作者の慣用語、語は『詩』桑柔に見ゆ。」と言ひ、「あつくるしさがいつまでもふかくのこつてゐるのでは、ときどきは寒さをかすといふことも必要になる。」と訳す。また前掲『全杜詩新釈』は、「執熱」について「熱不可解。」と言ひ、「『執熱』二句説、在執熱沈沈時候、正需要寒風來降溫。」と訳している。「沈沈」は多義的な語であるが、ここは霧やもやが立ちこめるように熱気が辺りをつつむことであらう。「執熱」は冒頭の「南国の瘴」を受けて言う。

#### 四 陸龜蒙の詩と宋代の詩

杜甫の詩以外に「執熱」の語が見えるのは、唐詩においては陸龜蒙（？〜八八二）の「読襄陽耆旧伝、因作詩五百言、寄皮襲美」（『全唐詩』卷六一七）のみである。

披襟兩相對 襟を披いて兩り相対すれば

半夜忽白昼 半夜 忽ち白昼なり

執熱濯清風 執熱 清風濯ぎ

忘憂飲醇酎 忘憂 醇酎を飲むがごとし

詩意は、もし皮日休が訪ねてくれ、二人で語り合うことができれば時間の経過も知らず、すがすがしい風が吹いて暑熱が去り、うまい酒を飲んで憂いを忘れるかのようである、とならう。陳貽燮主編『增訂注釈全唐詩』（文化芸術出版社、二〇〇一）はこの詩の「執熱」に、「酷熱、熱得難以解脫。」という注を加える。容易に逃れられないようなひどい暑さだと言うのである。

宋代に入ると「執熱」の語がしばしば見られるようになる。いくつかの例を引いておこう。劉敞（一〇一九〜一〇六八）の「夜月」（『公是集』卷五）には次のようである。冒頭四句を引く。

執熱不可濯 執熱 濯ぐ可からず

昏昏倦衣巾 昏昏として衣巾に倦む

涼月如有情 涼月 情有るが如し

万里来慰人 万里 来つて人を慰む

また、蘇轍（一〇三九〜一一二二）の「和韓宗弼暴雨」（『欒城集』卷五）の冒頭には次の句がある。

執熱臥北窓 執熱 北窓に臥す

淋漓汗流注 淋漓りんりとして汗は流れ注ぐ

嘉祐年間（一〇五六～一〇六七）の進士である孔武仲の「初秋大熱」（『清江三孔集』巻五）は秋になっても酷暑が収まらないことを、次のように言う。

誰知祝融軍 誰か知らん祝融の軍

執熱趁趨来 執熱 趁趨として来るを

祝融は夏をつかさどる神。趁趨は次々にあらわれるさま。

さらに熙寧年間（一〇六八～一〇七七）の進士である郭祥正の「将遊五峯度夏代別倪倅敦復」（『青山集』巻一三）の冒頭にも、

六月執熱思雲泉 六月 執熱 雲泉を思う

五峯参差如紺蓮 五峯 参差として紺蓮の如し

という句がある。ほかにも用例が多いが、割愛する。

おわりに

さてこのように見てくると、「執熱」の語が、杜甫によって詩語として定着したことは明らかである。ただし、「執熱」の語が一般的に詩語と見なされているかどうかははっきりしない。『読杜詩説』が「多病執熱奉懷李尚書」の「執熱」について、当時の常語かと疑問を呈しているの

は当然である。詩語辞典の類を調べてみてもこの語を収録するものは少ない。管見に入ったものでは、江藍生・陸尊梧主編『実用全唐詩詞典』（山東教育出版社、一九九四）に「執熱」の項目があり、「酷熱」とのみ簡単に言って、杜甫の「毒熱寄簡崔評事十六弟」と「課伐木」を典故として引いているのみである。もちろん杜詩に見えるこの語を一律に「酷熱」と解釈することが不適切であることは今までに述べてきたとおりである。

そもそもこの語に多様な解釈が生じたのは、典拠となっている『詩経』において既に解釈が分かれていることに起因している。ただしこの点について言えば、杜甫は熱い物を手を持つという意味で用いることはないのであって、暑熱、あるいは酷熱、さらには暑熱に苦しむという意味で用いるのである。そのどれをとるかは詩によって異なる。「大雨」の「執熱」を暑熱と解釈するのは適切ではないし、「毒熱寄簡崔評事十六弟」中の「執熱」や「多病執熱奉懷李尚書」という詩題の「執熱」にしても、これを単に暑熱、もしくは酷熱と解釈するのは妥当とは言えず、これらは暑熱に苦しむと解釈するべきであろう。逆に「北風（春生南国瘴）」における「執熱」は酷暑そのものを指して言うと考えられる。「大雲寺贊公房四首」（其四）の場合は、暑熱

にまとわりつかれて、そこから抜け出せないように、精神的にすつきりしない状態を言うことも確かである。繰り返せば、杜甫の「執熱」について一定の解釈を機械的に適用したのでは、正確な理解に到達できなくなるといふことになる。

杜甫が暑熱に苦しんだことを詠ずる詩は枚挙にいとまがない。乾元元年（七五八）、華州にいた時にも、「早秋苦熱 堆案相仍」（『詳注』巻六）で、「七月六日苦炎蒸、对食暫 餐還不罷」（七月六日 炎蒸に苦しみ、食に対して暫く餐らわんとするも還た能わず）と言ったし、大暦元年（七六六）、夔州で書かれた「熱三首」（其一）（『詳注』巻一五）の冒頭四句では、次のように詠じている。

雷霆空霹靂 雷霆 空しく霹靂へきれき  
雲雨竟虛無 雲雨 竟に虚無なり  
炎赫衣流汗 炎赫 衣 汗を流し  
低垂氣不蘇 低垂 氣蘇よすがえらず

杜甫は夏ばかりでなく冬でも春でも暑熱に苦しめられた。永泰元年（七六五）の冬、雲安に着いた時には「又雪」（『詳注』巻一四）を書いて、「冬熱驚鷺病、峽深豺虎驕」（冬熱くして鷺鷺病み、峽深くして豺虎驕る）と詠じたし、大暦四年（七六九）、潭州にいた時には「宿花石戍」（『詳注』

卷二二）で、「地蒸南風盛、春熱西日暮」（地蒸して南風盛んに、春熱くして西日暮る）と詠じた。この苦しみは最晩年でも変わらない。「舟中苦熱遺懷」（『詳注』巻二三）では、次のように詠じられる。

入舟雖苦熱 舟に入り熱に苦しむと雖も

垢膩可漑灌 垢膩 漑すすぎ灌そそぐ可し

この詩の「苦熱」は「執熱」と置き換えることも可能であろう。

絶筆とされる「風疾、舟中伏枕書懷、三十六韻、奉呈湖南親友」（『詳注』巻二十三）においても、「鬱鬱冬炎瘴、濛濛雨滯淫」（鬱鬱として冬 炎瘴あり、濛濛として雨滯淫す）と述べ、冬でも毒気を含んだ暑さがおさまらないことを詠じている。

杜甫はこのような耐えがたい暑熱を詠ずる語として『詩經』から「執熱」を見出し、その時々之感概をこめて詩中に用いたと考えられる。杜甫の、古典の語に新たな生命を吹きこむ試みは唐代においてはほとんど賛同を得られることはなかったが、宋代に至ると多くの追隨者を生むこととなったのである。

注

(1) 小林勝人『孟子』(岩波文庫、一九七二)は、「……ところが今や、諸侯たちは天下無敵になりたいといひ願ひながら、しかも仁政を行なわないのは、これこそ暑熱を払いのけようとしながら、行水をしないうなもの、間違ひも甚だしい。『詩経』にも「この暑氣を払うのに、誰がよく行水せずにおられよう」と歌っているではないか。」と訳し、詳細な注を附した上で、「……執熱は『毛伝』によつて『熱を救う』とよみ、『熱を救う』とは『熱を救(防)ぐ』ことであり、すなわち『暑熱を払いのける』と解釈しておく。」と述べている。また、宇野精一『孟子』(全釈漢文大系、集英社、一九七三)は、引用された『詩経』を「だれでも熱い思いをして、水浴びせぬ者があるうか」と訳し、「普通には、熱い物をもつたあと、水でその手を洗つて冷やさぬ者はないと解する(趙・朱)。その他これを修正した二、三の説もあるが、何措や毛奇齡によると、『執熱』とは熱い物が体に迫ることで、『千字文』に「執熱願涼」とあること、暑熱に接して水浴びすることの意とするのがよい(西島蘭溪)。」と説明している。

(2) 『抱朴子』外篇卷一、臣節第六には、「抱朴子曰、臣喻股肱則手足也。履水執熱不得辞焉。」(抱朴子曰く、臣 股肱に喩うるは則ち手足なり。水を履み熱を執りて辞するを得ずと。)とある。臣を股肱と言うのは手足に喩えたのであり、君主の手足である臣は、水を踏んだり熱い物を手でつかんだりする苦勞を避けられないのである。これは「鄭

箋」の解釈に近い。

(3) あるいは、水浴して汗を濯ぎ流すことを願つてゐると解するべきかもしれない。

(4) 鍾惺の発言は『毛詩解』に基づくのであろうが未詳。また『詳注』の引用もこれとほぼ同様である。ただし、「孝亭解」の下に「詩」字を欠く。なお『集伝』には、「執熱、手執熱物也。」(執熱は、手に熱物を執るなり。)とある。

(5) 『説杜詩説』は「多病執熱奉懷李尚書」について次のように言う。

多病執熱奉懷李尚書、注引邵長蘅説、執、囚也、囚困於熱也。今按公詩、執熱多作極熱解。大雲寺贊公房云、「執熱煩何有」、夏夜嘆云、「執熱互相望」、大雨云、「執熱乃沸鼎」、……、皆是。夏夜嘆注、引鍾惺説、……、此説亦是、邵説解作囚字、非也。然疑只當時常語。

多病執熱奉懷李尚書、注に邵長蘅の説を引く、執は、囚われるなり。囚われて熱に困しむなりと。今公の詩を按ずるに、執熱は多く極熱の解と作す。大雲寺の贊公の房に云う、「執熱、煩何可有らん」と、夏夜嘆に云う、「執熱、互いに相い望む」と、大雨に云う、「執熱乃ち鼎を沸かす」と、……、皆是れなり。夏夜嘆の注に、鍾惺の説を引く、……と。此の説亦是なり、邵説、解して囚の字と作すは、非なり。然るに疑うらくは只當時の常語なるのみならん。

(6) 管見の範囲では、清・陳啓源『毛詩稽古編』卷三〇に、

「誰能執熱、近世楊用修謂熱不去體爲執、執非手持之義。

杜詩執熱露白頭、韓文如熱之濯清風、古義本如此。」(誰能執熱、近世の楊用修は熱 體を去らざるを執と爲す、執は手持の義に非ずと謂う。杜詩の「執熱露白頭」、韓文の「熱之濯清風」の如きは、古義は本此の如し。)という指摘がある。明・楊慎の発言は未確認だが、彼も「執熱」を身体にまとわりついて離れない暑さと解していたことになる。

(7) 「執如執友之執」に付された原注に、「執、固執也。」(執は、固執するなり。)とある。

(8) 詩以外では、例えば韓愈「答張籍書」(『全唐文』卷五五一)に、「今乃大得所因、脫然若沈疴去體、灑然若執熱者之濯清風也。」(今乃ち大いに因る所を得て、脱然として沈疴の體を去るが若く、灑然として熱に執わるる者の清風に濯ぐが若きなり。)という用例がある。

(9) この詩でも、自身が炎熱に苦しむことを詠するだけではなく、(其三)では「歛翁炎蒸景、飄飄征戍人、十年可解甲、爲爾一霑巾」(歛翁たり炎蒸の景、飄飄たり征戍の人、十年 甲を解く可し、爾の為に一に巾を霑す)と述べて、従軍する兵士たちの境遇を氣遣つており、「夏夜歎」の構成と共通する点が認められる。

(10) 杜甫が暑熱に苦しめられたことに着目して詠じた詩人に、嘉靖四四年(一五六五)の進士で、万曆三年(一五七五)に四川提学副使となつた陳文燭の「浣花溪納涼」(『詳注』補注卷上、諸家詠杜)があり、「朱夏多炎暑、束帶發長歎、

……杜陵亦苦熱、高咏江之干」(朱夏 炎暑多く、束帶長歎を發す、……杜陵も亦熱に苦しむ、江の干（かわのかわら）に高咏す)と詠じている。

(北海道教育大学札幌校)